

Title	アメリカ植民地工業の歴史的形態
Sub Title	The form of the industry in the colonial America
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.11 (1953. 11) ,p.905(23)- 925(43)
JaLC DOI	10.14991/001.19531101-0023
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531101-0023">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531101-0023</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るに我國の經濟は當面更に相當の期間に亘つて烈しい動搖を蒙むることが當然豫想せられるのである。原價と原單位の變動は其の相關性を失うのみならず、全然反對となることすら考えられる。妥當な經營計畫は傳統的原價計算のものでは立ち得なくなる惧れるが多分に存するのである。

(註一) Goetz: Op. cit., P. 277—278.

(註二) Goetz: Op. cit., P. 168—190.

(註三) Goetz: Op. cit., P. 191—228.

(註四) 拙著「生産管理論」(昭三三、復關書房)九五—一二三頁

(註五) 拙稿前掲「會計現象と會計學の實踐科學的意義」参照

## アメリカ植民地工業の歴史的形態

中村 勝己

アメリカ植民地經濟の構造を極めて大雑把に言つて見るならば次の様に言へよう。先ず北・中・南部を通じて東部大海港都市(ボストン、ニュー・ヨーク、フィラデルフィア、ボルティモア、チャールストン等)の大商業資本は、沿岸・三角貿易に従事した丈でなく、不動産、商業に密接に關係ある粗工業(例えば醸造業・精糖業・製粉業・加里工業及び鐵工業——トラフィック工業)、金融・高利貸業(イギリスへの投資をも含む)、及び海上保險業等に投資して居り、植民地官吏・大地主・教養ある自由業者(法律家・牧師等)と婚姻又は投資を通じて密接な關係を保ち、一致した利害關係の下に支配階級乃至「商人貴族制」を形成して居た。農業については、北・中部は繁榮せる小農民と、中部のハドソン河流域の大土地所有者を以て、南部はプランター(タバコ・穀物、米・藍の生産者)と奥地の小農民を以て、又工業については、植民地を通じて半農半工の小生産者及びその中から漸く分出しつつあるマニユファクチュア主と、之と對照的な、そして當時にあつては支配的形態であるところか、寧ろ逆に例外的な存在でさえある巨大マニユファクチュアを以て特徴づける事が出来る。而して之等を蔽い規制せんとするイギリス重商主義の體系、之等が植民地經濟の瞥見である。

アメリカ植民地工業の歴史的形態

扱ヴィクター・S・クラークはその大著「アメリカ工業史」の中で「アメリカに於ける工場制度の起原」に言及して次の如く述べている。即ち多数の労働者を一つの部屋又は建物の中に集め、製造工程を行わせる紡績教習所、救貧院・プランテーション工場・問屋制度・水車場等を挙げ、其等は何等かの意味で「我その先祖の心に工場の観念を形づくり、その具體化を早めた」が、其等が夫々「どれ位の比重をもつたかを推測する事は無用な事である」としている。併し乍ら上述の諸形態が何らかの意味で工場制度——勿論其は單に機械を使用するとか、多数の労働者を一ヶ所に集めて作業させるといふ意味のものでなく、労働力そのものを商品化する事によつてのみ成立する資本—労働関係を基軸とする、語の本來の意味での工場制度——に連なるといふ見解は果して妥當と云えるであらうか。以下に私はクラークを手懸りに、植民地工業の基軸である織物業及び鐵工業の歴史的形態を探つて見たいと思ふ。

- (1) East, Robert A., *Business Enterprises in the American Revolutionary Era*, (N.Y., 1938) Chapter I. (pp. 13-28); かかる蓄積資本に對するクラークの評價を見よ。 Clark, Victor S., *History of Manufactures in the United States*, (N.Y., 1929), Vol. I. 1607-1860. p. 145-6, 152.
- (2) Clark, *Ibid.*, pp. 188-193.

二

(一) 資本主義的發展に關して後進地域であつたアメリカ植民地では織物業部門に於て上から特權マニユファクチュアが設立された。

(2) 先ず第一はポストンニュー・ヨーク、フィラデルフィア其他に設立された慈善的工業團體により營まれた

製造場である。この種の團體は貧民に仕事を與え製造業を促進するという公共の福祉を主な目的とした團體である。

例えばイギリスとの敵對關係が始つてから、「フィラデルフィア・アメリカ製造業促進聯合組合」The United Company of Philadelphia for Promoting American Manufactures (一七七五年設立)は「四紡錘のシエニー一臺及び恐らく同種のもう一臺を備え、約五〇〇名を雇い、その大部分は各自の家庭で紡績に従事し、恐らく織布工程は製造場で行つた様である。一七八七年復活後直ちに機械を購入し、翌年春には二二四錘を動かす四臺のシエニー、刷毛機一臺、織機二六臺を備えたが、紡績工程は矢張各生産者の家庭で行つたらしい。生産物は大部分麻及び綿織物で、機械据附後約六ヶ月で二二、〇〇〇ヤードを生産したと記録されている。<sup>(1)</sup> 又「ポストン工業獎勵・貧民雇傭協會」Boston Society for Encouraging Industry and Employing the Poor (一七五一年設立)<sup>(2)</sup>の作業場はリンネル製造業者ジョン・ブラウン、靴下製造業者アダム・ラップ等によつて賃借されていたが、就中ウィリアム・モリノーは一七六九年ここに紡績教習所を開き、四百臺の紡車を備えて、少くとも三百名の女・子供に最も完全に紡ぐ事を教えた。後更に設備を擴張し多量の生産物を製出した。<sup>(3)</sup> 一七六七年ニュー・ヨークのリンネル製造業者は「ニュー・ヨーク技術・農業及び經濟獎勵協會」New York Society for the Promotion of Arts, Agriculture and Oeconomyの保護の下に、「一四臺の織機を動かし、三百名の貧民に仕事を與えていた。<sup>(4)</sup> フィラデルフィアのサムエル・ウェザリル、ボルティモアのエドウィン・パーカー、チャールストンのダニエル・ヘイウッド等もその例である。<sup>(5)</sup> 總じてこの種のマニユファクチュアは一八世紀後半イギリスとの敵對關係が始つた時愛國的動機から紡績に従事した多数の婦人労働者を集中したが、生産工程のうち紡績工程は主として各家庭に委託し、織布及び仕上工程のみをマニユファクチュアで行つた。即ちマニユファクチュア經營者はマニユファクチュアの外部に於て原料を前貸する事

により小生産者を間層的に支配していた。しかも其等は種々の形態で上からの保護・特権を受けていたにも拘らず、概して不安定且短命であつた。クラークは之等を「獨立戦争前の植民地に於ける織物工場へ最も接近したものの」とか、工場組織の一層の前進であるとか、「この方向への（工場組織の）——引用者」最初の重要な一歩」として理解して居る。又カークランドの如く「之は工場ではなかつたにしても、其に最も近づいたものであつた」と考ふる者もある。併し乍らこの巨大マニファクチュアは國民的工業の發展を媒介するものとしての意義は認められるが、全機構的には例外的存在であり、上から工業を國內に移植・創出せんとしたものである。

- (1) Clark, Op. cit., p. 183, 190; Morris, Richard B., *Government and Labor in Early America*. (N. Y., 1946), p. 44.
- (2) Clark, *Ibid.*, p. 183, 189, 206; Morris, *Ibid.*, p. 44.
- (3) Clark, *Ibid.*, p. 189.
- (4) Clark, *Ibid.*, p. 189—190, 192; Morris, *Ibid.*, p. 144.
- (5) Clark, *Ibid.*, p. 208, p. 192; Morris, *Ibid.*, p. 44.
- (6) Clark, *Ibid.*, p. 190—191.
- (7) Clark, *Ibid.*, p. 189, 190.
- (8) Pirkland, E. C., *A History of American Economic Life*. (rev. ed., N. Y., 1939), p. 91. quoted by Morris, *Ibid.*, p. 44.

(b) 救貧院・強制労働場

植民地でも母國と同様強制労働場制度が導入された。早くも一六五八年にはプリマス植民地で自己のパンを自ら稼ぐ爲に働こうとしない浮浪者・怠け者・不良兒・頑固な召使等を矯正する作業場を設立する法律が通過している。一

八世紀半迄にボストン、ニュー・ヨーク、フィラデルフィア、チャールストンに強制労働場が設立された。一七三一年にはニュー・ヨーク市に對し、「乞食、逃亡又は不行跡な召使、家宅侵入者、無頼漢、浮浪者及び労働を拒絶する貧民」の爲に矯正院及び強制労働場として用いられる救貧院を設立する権限が與えられている（モントゴメリー・チャーター）。此等の中に設けられたマニファクチュアは收容された輕犯罪者及び貧民に紡績・織布を行わせた。一七三四年ニュー・ヨークの一救貧院が共同地に建てられ、四臺の紡車を含む道具を與えられている。一七三九—一七四六年にフィラデルフィア強制労働場はその收容者によつて造られた綱具・製囊材料・着色糸及び染色リンネルの販賣を廣告している。ここでは資本は主として織布に用いられ、紡績に市場を與える事により、其を奨励せんとしたものである。獨立戦争前の輸入阻止運動は一般國內工業にとつて有利に働いたが、上からの援助を受けていた毛織物・リンネル・綿工業にこの種の貧民を用うる計畫にも拍車をかけ、低廉な労働力の供給を保證すると共に貧民救済の負擔を軽減したのである。

この種のマニファクチュアの労働力は文字通りに強制的に拘置乃至緊縛された強制労働であり、逃亡は素より嚴重に防止され、主に織物業に従事していた。かかる場合に本來の資本—労働關係などは現れる筈がなく、寧ろ労働者に強制的に技術的・社會的訓練を施し、かくて國民的生産部門に労働力を供給せんとするものとして意義づけらるべきであらう。

(6) 本項は主として Morris, Op. cit., p. 12—13, Clark, Op. cit., p. 188—189. に據つた。

(c) プランテーション工業

メリーランドのプランター、チャールス・キャロルはキャロルトンのプランテーションに織機室を擴大した程度の

アメリカ植民地工業の歴史的形態

製造場を設け、奴隸用衣服及び粗末なホームズパンを生産していたが、勞働力は奴隸及び契約奉公人から成り、熟練監督者の監督と教育の下に勞働していた。<sup>(10)</sup> 又ヴァージニアのプランター、ロバート・カーターは織布工ダニエル・メリヴァンの監督下に奴隸の織布工六名・糸巻工四名をして同様の生産に當らせて居た。<sup>(11)</sup> 更に一七七七年チャールストンの南の二プランターは、白人男女各一名の織布工の監督下に三〇名の奴隸をして毎週綿・毛交織物一二〇ヤードを生産させていた。<sup>(12)</sup> ここに於ては工業經營者は外ならぬ半封建的土地所有者にプランターであり、そこを貫くものはプランター——奴隸という身分的從屬關係である。そして生産物は主として自給用である。それ故に此等の發展の中から、かのスレイターに先立つて水力による小規模のジェニー工場が出現した<sup>(13)</sup>としても、本來の資本——勞働關係は排除されてきた。

(10) チャールルス・キャロルは有名なパタプスコ織工業に五分の一の出資をし、織工業に於ける非商人資本家の一人とされている

(East, Op. cit., p. 19)。獨立宣言署名者の一人。Clark, Op. cit., p. 191.

(11) Commons & Associates, A Documentary History of American Industrial Society, Vol. II, p. 315; Morris,

Op. cit., p. 38.

(12) Clark, Ibid., p. 191.

(13) Clark, Ibid., p. 191.

以上に於て織物業に於ける特權集中マニファクチュアを検討したが、之等は當時の一般的形態であるところか、寧ろ逆に例外的存在なのである。その下には小生産者を問屋制的に支配し、織布工程或は仕上工程を行つていた。勞働力は或は貧民婦女子に、或は孤兒・浮浪者・犯罪人を強權的に拘置・緊縛した強制勞働に、或いは更に黒奴・契約

奉公人の不自由勞働に依存する。しかも前期的商業資本の凝集點ボストン、ニュー・ヨーク、フィラデルフィア、チャールストンに分布し、或はプランテーション制度そのものと結付いている點正しくその本質を物語るものと云えよう。従つて之等を工場組織への一步乃至接近として理解しようとする立場は明白に誤であり、この上からの體系は結局本來の資本——勞働關係への必然性を自らの衷に持たないと云わざるを得ない。

(a) 然し乍ら他方に於て、この上からの體系に對應して廣汎に半農半工の小生産者 farmer-craftsman が存在し、しかもその中から次第に家族勞働に若干の雇傭勞働を加えて規模を擴大し始め、獨立の職場主へと上昇し始める者が現れて来る。この事情を毛織物業について検討して見る。先ず、(1) 毛織物業。紡毛工程は作業が簡單なので通常婦人・子供により各家庭で副業的に行われた。織布工程は男子熟練工が自己の仕事場で耕作勞働の餘暇に行つたが、次第に専門化されて行つた。縮絨工程も男子熟練工により水力を利用して行われ、縮絨場の數もかなりの數に上る。仕上工程も家庭から漸次分離され、縮絨場所有者により行われた。經營形態としては中央職場制・巡回織布工・中間形態の三つをとる。中央職場制はかなり人口の多い地方に限られ、顧客が織糸を持參する。縮絨場とつなげて設けられる事もある。巡回織布工は農村を巡回し、富裕な農民や家族中に織布の出来る者の居ない家庭に雇われ、注文に應じて織布した。ニュー・ヨークでは彼等に對する需要は通例の事であつた。中間形態は自己の職場を都市にもちつて慣習的に夏期の何ヶ月かを農村の巡回に用うるもので、ロード・アイランドに見られた。問屋制度は未だ現れていないといつてよい。(2) 新毛織物業。主に都市の専門の熟練工により行われたが、紡毛工程は問屋制による事もあり、稀には巡回職人による事もあつた。<sup>(14)</sup>

然らば之等の國內生産物はどの社會層が着用したか。先ず農民の大部分、都市の中・下層及びプランテーション内

部の奴隷が考えられる。之に對し多量のイギリス製品が輸入されている。その中、高級品は東部商業都市の上流階級及び南部のプランターにより求められたものである。その購買力は商業都市では三角貿易による富であり、プランターの場合はタバコ及び米の様な主生産物によるものである。彼等は國內製品に對する強い偏見を抱いて居り、財政的に困窮し國民の壓力を受けつつも舶來品への強い執着を示し、獨立戰爭直前のイギリス商品ボイコット運動にも容易に同調しなかつた。又廉價品は都市の中・下層向の中自給出來ぬ部分を補い、或はプランテーションの奴隷用であつた。中級品は都市に限られ、餘り重要ではない。<sup>(15)</sup>

毛織物の小生産者は古くはピルグリム・ファーザーズの中に三名見出され、一六四三年にはヨークシャーの毛織物業地帯から二〇家族以上がマサチューセッツのロウリーに移住し、この國最初の縮絨場を設立している。<sup>(16)</sup> その後の毛織物生産の展開について詳述する事は省略したい。都市から絶えず農村に移動し、半ば農民化しつつあつた小生産者は植民地時代は素より、かなり後迄農村を特徴づける存在であつたが、彼等の中から徐々にその經營規模を擴大し、獨立の職場主となる者が現れて来る。そしてその様な農村工業の凝集點として、農村の只中から工業村、落、市場町、工業<sup>インダストリアルタウン</sup>が浮び上つて来る。例えばペンシルヴェニアのランカスター<sup>(17)</sup>では一七七〇年頃を境に、從來この町の三分の一の家庭が従事していたリネル及び毛織物生産が、次第に専門の織布業者の手に移つて行つた。多數の日傭職人及び徒弟を雇傭する親方織布工はその地方の織物業を牛耳り、更に關聯業者として多くの梳毛工、縮絨工、藍染工<sup>ダイア</sup>、箴及び織機製造者が勃興した。銃砲生産者、幌馬車生産者等をも含めて、ランカスターには一七七〇年に二六四名の親方職人(納税者の六六%)が活躍していた。植民地時代の末期にはこの種の工業町としてチャーマンタウン、ベツレヘム<sup>(18)</sup>、ヨーク<sup>(19)</sup>、トレントン<sup>(21)</sup>等を擧げる事が出來よう。之等はボストン、ニュー・ヨーク、フィラデルフィア等の

大商業都市から或程度の距離を保ち、そこを經由するイギリス商品の波が及ばない農村に位し、特殊の製造業の中心となる事によつて大商業都市の商業圏から離脱し、局部的市場を形成し始める。

對本國關係の悪化による國産衣料着用運動が起つた時、之に強く抵抗したのは東部の支配階級であり、イギリス製高級品の輸入杜絶によつて大部分の植民地人は打撃を受けなかつた。この時の衣類の缺乏は軍用の其であり、家内生産による毛織物は家族の必要を充す丈でなく、その餘剰を販賣する程であつた。<sup>(22)</sup> イギリス製品の波と國內生産力とは對抗關係にあり、獨立後も約半世紀に亘つて悩まされるが、ここに我々は「國民的生産」對「反國民的需要」、「國民的産業」對「イギリス重商主義及び其と連なる産業」という矛盾し對立する二つの體系を見出す事が出来る。

- (15) Cole, Arthur H., *The American Wool Manufacture*, 2 vols. 1926. Vol. I, pp. 7—20.
- (16) Cole, *Ibid.*, pp. 20—30.
- (17) Cole, *Ibid.*, p. 4. Weeder, *Economic and Social History of New England*, 2 vols., 1890, Vol. I, p. 176.
- (18) ランカスターのことは Clark, *Op. cit.*, p. 89, 185—186, 221, 345, *Bridenbaugh, Carl, The Colonial Craftsman*, (N.Y., 1950), pp. 115—120.
- (19) Clark, *Ibid.*, p. 93, 153, 186, 206, *Bridenbaugh, Ibid.*, p. 54—55.
- (20) Clark, *Ibid.*, p. 186, *Bridenbaugh, Ibid.*, p. 55—56.
- (21) *Bridenbaugh, Ibid.*, p. 56—57.
- (22) Clark, *Ibid.*, p. 168, 171, 177, 178, 186, 221, 514, 518, *Bridenbaugh, Ibid.*, p. 57—59.
- (23) Clark, *Ibid.*, p. 223.

## 三

鐵工業は織物業と並んで早くから植民地に行われ、イギリス重商主義體系の一環として本國に銑鐵を供給する爲に遠くイギリスから資本が投ぜられていた。鐵工業は第一には農機具・道具等生産手段の生産、第二に特に對本國關係の緊迫と共に軍事工業として、上からの保護特權を受けつつ急速に發展した。其等の經營形態のあり方を以下に及ぶ限り述べて見る。

一六四三年ウインズロップがイギリスから一、〇〇〇ポンドの資本と労働者を携えてリンに鐵工場を設立し、多くの特權を受けて以來、ジョーゼフ・ジェンクス父子、更にブレイントリー、トウントン、ロウリー、カントン、ウイディングトン、チャートリー、ホープウエル等の各鐵工場に關係したレナード一家、銑砲生産者ヒュー・オー其他多數の鐵工業者は、或はイギリス人又は植民地人のカムペーニ制により、又は個人所有による鐵工場で、沼鐵を用い木炭を燃料として生産に従事していた。<sup>(1)</sup>併し一七八四年に於てさへマサチュセッツには七六の鐵工場が存在したが、その多くは小さかつた。<sup>(2)</sup>而して沼鐵を使用するマサチュセッツの熔鑛爐は生産方法も幼稚で生産額も小さく、「數トンの注文が来た時、附近の農民は熔鑛爐に集つて来て、爐に風を吹込んだ」<sup>(3)</sup>。一七五〇年頃にはマサチュセッツ西部では赤鐵鑛が用いられ始めていた。<sup>(4)</sup>沼鐵採取は一ヶ所で約二十年が限界であり、燃料も銑鐵一トン生産に木炭二二〇ブッシュェルを要し、<sup>(5)</sup>自然的にも技術的にも基礎が狹隘であつた。併し上からの特權を受けつつ、直接生産者は労働要具や武器の生産に従事し、次第にその地位を向上して行つた。「鐵工場のある所レナード一家あり」<sup>(6)</sup>と云われたレナード家は獨立戰爭迄南部マサチュセッツの經濟的・政治的生活を全く支配し、さながら貴族の如き生活をしていた。<sup>(7)</sup>又ジョーゼ

フ・ジェンクス(三世)は一七二七—一七三三年迄ロード・アイランドの知事であつた。<sup>(8)</sup>斯の如く彼等の上層は次第に上昇し支配階級に成上つて行く。しかも彼等の中から熱烈な獨立論者を産み出している。

(1) 以上引くは Swank, *Iron in All Ages*, 1892, pp. 108—119

(2) Swank, *Ibid.*, p. 128.

(3) Swank, *Ibid.*, p. 127 (傍點引用者)

(4) Swank, *Ibid.*, p. 122.

(5) Swank, *Ibid.*, p. 122.

(6) Swank, *Ibid.*, 卷末人名索引の Leonard の項参照 (p. 548); Bining, Arthur C., *British Regulation of the Colonial Iron Industry*, 1933, p. 12, 126—7.

(7) Bridenbargh, *Op. cit.*, p. 44.

(8) Swank, *Ibid.*, p. 119.

中・南部鐵工業の特徴は何よりも「アイアン・プランテーション」である。其は差當り次の様なものである。先ずその規模は様々であるが多くの數千エーカーの土地の外に、邸宅、労働者住宅、熔鑛爐及び鍛工場、鐵鑛山、炭燻場及び木炭用森林、事務所、雜貨店、製粉場、製材場、鍛冶場、共同パン焼窯、納屋、穀物畑、果樹園等の設備を有する巨大な自給自足體であり、水力利用と運送の爲多くは河川・運河又は道路に沿つて位置する。そしてかかる設備に加えて、労働力として例えば燃料生産に四〇名、運炭夫四〇名、採鑛夫八名、運搬夫八名、石灰石採掘夫三名、同運搬夫九名、熔鑛爐建設夫一名、同助手一名、鍛工場事務員一名、熔鑛爐事務員一名、熔鑛夫四名、鍛工八名、豫備員二〇名、計一四四名の労働者を擁している例がある。<sup>(10)</sup>

アメリカ植民地工業の歴史的形態

資本の源泉としては次の三つが考えられる。即ち第一には外國資本、第二に地主・商人資本、第三に小生産者の蓄積。先ず

(4) 外國資本。一七世紀の半ば以降イギリスでは燃料用森林の涸渇から銑鐵及び棒鐵の生産が減退し始めているが、スウェーデンに依存出来ぬという政治的・軍事的見地から、植民地の製鐵業と結び付こうとする動向が一七二〇年代に現れて来るが、かかる動きに應じてイギリス資本が直接植民地に投下された。プロシヤの著名な貴族ペーター・ハーゼンクレーファーはイギリス資本によるアメリカン・アイアン・カムパニー（展々ロンドン・カムパニーとして知られる）の資本一、〇〇〇ポンドを携え、ドイツ人労働者五三五名及びその家族と共にニュー・ジャージーに渡來し（一七七六年）、土地を購入し熔鑛爐三、鍛工場六及び附屬工場若干を建設し、五四、〇〇〇ポンド（又は三ヶ年に二五、〇〇〇ポンド——クラーク）を投下したが、經營状態不良な爲ドイツに歸り、シレジアで麻織物業を營み成功した。クラークが「之は獨立戦争前のアメリカに於て企てられた最大の工業企業であつたが、植民地がそういう活動の舞臺であり又該企業により技術的・組織的・經營的な面でどれ丈利益を受けたとしても、其は事業の性格から云つて本質的にヨーロッパ的であり、土着の工業組織の發展の段階を示すものではない」と述べたのは正當な理解を示すものである。更にドイツのステイゲルは「一七五〇年ロッテルダムから渡來し、ドイツ資本——少くともその一部は——によりペンシルヴェニアに鐵及ガラス工場を經營していた。即ちドイツ人ジョン・ヒューバーにより建設されたエリザベス熔鑛爐を一七五七年パートナーと共に購入し新な爐をも設けたが、財政困難の爲手離している。彼等はこの爐から多數のストーヴを生産し、其は廣くランカスター、レバノン兩郡に行き互つていた。其他リン鐵工場はイギリス人と植民地人から成るカムパニーにより始められている。プリンシピオ・カムパニーは最初全資本をイギリス製鐵業者

に仰いだが、後植民地在住の經營者やワシントン家其他も參加する様になつた。オウガスチン・ワシントン（ジョージ・ワシントンの父）は鐵鑛を産出する土地約一、六〇〇エーカーの地主として、カムパニー財産の六分の一の所有者であつた。又同カムパニーはメリーランドにも若干の企業を有していた。かくて外國資本による企業は何よりも重商主義的要求により、當時の土着産業の規模と技術の水準を越えたものを上から移植せんとするものであり、其故に植民地鐵工業にとつては異質的・例外的存在であつた。獨立に際してはプリンシピオ・カムパニーの如きはパートナーが本國側と植民地側に分裂したが、マウント・ホープ熔鑛爐の如くロンドン・カムパニーと手を切つて植民地に興するものも現れて來た。

- (6) Bining, Op. cit., p. 19.
- (10) 一六五七年アマトニー・ラングスタウン設立のヴァジニア所在鐵工場の例。Morris, Op. cit., p. 39—40.
- (11) Bining, Ibid., pp. 32—48. 矢口孝次郎「イギリス政治經濟史」二〇九—二一〇頁。かかる傾向は木材業及造船業にも現れるものも現れて來た。
- (12) Clark, Op. cit., p. 147.
- (13) Swank, Op. cit., p. 149—150. Clark, Ibid., p. 147, 174; Bining, Ibid., p. 18.
- (14) Swank, Ibid., p. 106, 147, 169, 209; Clark, p. 176, 179, 180, 181.
- (15) Clark, Ibid., p. 146.
- (16) 一七二三年カムパニー設立當時、其はウォーリックシャーの地主ウィリアム・チャートウインド、ロンドン商人ジョシヤ・ジョー、バーミンガムの製鐵業者ウィリアム・ラッセル、スタフォードシャーの製鐵業者ジョン・イングラント、製鐵業者ジョー・セン・フアーナー及びジョン・ラストンから成つてゐた。(Swank, Ibid., p. 242).
- (17) Clark, Ibid., p. 147.
- (18) Swank, Ibid., p. 503.

アメリカ植民地工業の歴史的形態



(18) Clark, Ibid., p. 173-4.

(19) Swank, Ibid., p. 151-2.

(2) 地主・商人資本其他

上述の外國資本に呼應して植民地内部からも資本が投下される。即ち植民地の大地主・前期的商業資本・植民地官吏・裁判官・法律家等支配階級の中から鐵工業に投資する者が現れて來た。一七四〇年以前にリヴィングストン領の所有者フリップ・リヴィングストンはハドソン河東岸コロンビヤ郡にニュー・ヨーク最初の鐵工場を設け、早くも一七五〇年には之を擴張している。彼は獨立宣言署名者フリップの父である。<sup>(20)</sup> 又ニュー・ジャージーのモリス郡の大地主ジェイコブ・フォード (Sr.) は一七五〇年に鐵工場<sup>(21)</sup>をマウント・プレザント (ロックアウェイの西三哩) に建設し、ジェイコブ・フォード (Jr.) もミドル鍛工場の所有者となつた。更に地主スターリング卿<sup>(22)</sup> [後の植民聯合軍の將領。本名ウイリアム・ズレクサ] もニュー・ジャージー及ペンシルヴェニアで鐵工業に従事している。彼は前述ハーゼンクレーファに土地を賣り、モリス郡のハイバーニア所有のナドヴェンチャー熔鑛爐に投資し、一七六九年に議<sup>(23)</sup> 會から特權を與えられ、一七七三年 (又は一七七年?) にはその單獨所有者となつてゐる。<sup>(24)</sup> 前述せるメリーランドのプランター、チャールス・キャロルは有名なバクブスコ鐵工業の資本の五分の一を出している。

一方ボストン、フィラデルフィア、ニュー・ヨーク等の商業資本はその活動と密接に關聯する工業部門に投資したが、鐵工業もその重要な一部門であつた事は冒頭に述べた。例えばロード・アイランドのステファン・ホプキンス [獨立宣言署名者]、ニコラス及モーゼス・ブラウン兄弟はジャベス・ボウエン、イズラエル・ウイキンソンと共に一七六九年に有名なホープ熔鑛爐を始めてゐる。其に先立つ一七六五年にはシチュエーの南東で既に製鐵に従事してい

る。<sup>(25)</sup> 又ニュー・ヨークの若干の商人も同様の投資をしてゐる。<sup>(26)</sup> フィラデルフィアのアレン家及びモリス家<sup>(28)</sup>も多年に亘つてニュー・ジャージー、ペンシルヴェニアで鐵工業に従事している。即ちウイリアム・アレン [一七五二—一七七四年のペンシルヴェニアの裁判長、フ] はジョーゼフ・ターナー [フィラデルフィア商人] と共にユニオン鐵工場を設立し砲彈を製造していたが、工場は一七七八年拋棄され、彼自身はロイアリストとして一七八〇年ロンドンで死んでゐる。又兩人はアントニー・モリス、ジェイムズ・ローガン [ウイリアム] 等十四名と共にカムパニーを作り、ダーラム熔鑛爐を設立し、イギリスに鉄を供給してゐる。この熔鑛爐では一七四〇年頃から大量にストーヴを生産し、奴隸を勞働力としてゐる。<sup>(29)</sup> この熔鑛爐の所有者の一人製鐵業者ジェイムズ・モルガンの子、ダニエル・モルガン將軍は若い頃父を助けてここで働き、炭焼夫であつたといふ。<sup>(30)</sup> 又獨立宣言署名者ジョーデ・テイラーはウエイルズ生れで身請渡航人<sup>(31)</sup>として渡來し、一時ここで填鑛工をしていたが後、單獨でこの賃借人となつた。

ランカスターの法律家・獨立宣言署名者ジョージ・ロスは、一七六二年にメアリ・アン熔鑛爐の建設を始めた。一七六三年に特別の公道建設を請願したが、之は多額の費用を投じて完成されてゐる。ここではストーヴを生産し獨立戰爭中は砲彈生産を行つた。<sup>(32)</sup> マサチューセッツの裁判長ピーター・オリヴァーは一七五一年プリマス郡ミドルスバラの鐵工場設立に投資しているが、之は投資文に止まり經營には手を出していない。<sup>(33)</sup> 又ジョン・テイラーは早くも一七四二年にペンシルヴェニアのデラウェア郡ソーンベリに鍛工場を設立し、一七四六年には壓延工場及び鐵工場を増設している。彼の祖先はイギリスのウイルトシャーの出身であるが、彼自身はペンシルヴェニアの檢事總長 [一七二七—一七三三年] ジャコブ・テイラーの甥である。主として釘及び釘<sup>(34)</sup> 桿を生産し、その安價な事はリヴァプール商人を驚かし、一七五〇年の鐵條例を齎らす契機となつた。

- (20) Swank, *Ibid.*, p. 186; East, *Op. cit.*, p. 19.
- (21) Swank, *Ibid.*, p. 188.
- (22) Swank, *Ibid.*, p. 149.
- (23) Swank, *Ibid.*, p. 161. 彼は大土地所有者・鐵工業者ノリッペン・リヴィングストンの娘を妻とし、従つて前記獨立宣言署名者ノリッペンとは義兄弟の關係にある。(Swank, *Ibid.*, p. 182-3).
- (24) East, *Ibid.*, p. 19.
- (25) East, *Ibid.*, p. 19; Swank, *Ibid.*, p. 127.
- (26) East, *Ibid.*, p. 19.
- (27) East, *Ibid.*, p. 19; Bining, *Ibid.*, p. 17, 77, 91; Swank, *Ibid.*, p. 155, 156, 159, 168.
- (28) East, *Ibid.*, p. 19; Swank, *Ibid.*, p. 249 索引参照。
- (29) Swank, *Ibid.*, p. 168-9.
- (30) Swank, *Ibid.*, p. 169-170.
- (31) Swank, *Ibid.*, p. 170, 502.
- (32) Swank, *Ibid.*, p. 184.
- (33) East, *Ibid.*, p. 19; Swank, *Ibid.*, p. 121.
- (34) Swank, *Ibid.*, p. 177-8.

斯の如く鐵工業は先ずイギリス重商主義の要求として、次いで生産手段の生産と軍事工業として、夫々の意味で上からの保護・育成・特権によつて形成された特権マニファクチュアである。既に見た様に、外國資本・地主・商人資本等が投下されているが、外國資本による企業も獨立戰爭に際しそのパートナーが或は分裂し、或は植民地側に味

方して植民地軍に武器彈藥を供給している。又大土地所有者——多くの場合その所有地に鑛床を有する——に加えて、ボストン、ニュー・ヨーク、フィラデルフィア等の前期的商業資本が自己と密接な關係をもつ粗工業の一部門として鐵工業に投資している例も少くないが、この兩者と並んで、兩者と共に支配階級を構成する裁判官・法律家等も舞臺に姿を現わす。彼等の構成する特権的企業者層は廣汎に存在する小生産者——之については後述する——を従えつつアイアン・プランテーションという特徴的經營形態をとる。あの巨大な自給體の内部の勞働力は奴隸及びドイツ或はアイルランドからの年季契約奉公人から成る事<sup>(25)</sup>を思えば、スワンクがペンシルヴェニア鐵工業を特徴づけた次の言葉は妥當なものとして肯けるのである。即ち「……その所有者は殆んど封建領主であり、彼等に對して勞働者及びその家族は仕事の面丈でなく、生活萬般について助言と指導を求めた。彼等は屢々黑人勞働者を文字通り所有し、又彼等に對し白人身請渡航人は屢々海を横切る旅費を支拂う爲或期間束縛されていた。又彼等は製鐵と共に農場を耕作した。彼等は政治を支配し、教會を維持し、近所の學校を十分に維持した。又軍隊組織の中堅 (captains and colonels) であつた。……(中略)……昔のペンシルヴェニア製鐵業者により行使された權力は實際領主的<sup>(26)</sup>であり、家父長的<sup>(27)</sup>でもあつた。……」

(25) Swank, *Op. cit.*, p. 188. 鈴木圭介「アメリカ經濟史研究序説」八七頁。友好的インディアン使用の例は Swank, *Ibid.*, p. 168. インディアン捕虜使用の例は Swank, *Ibid.*, p. 180.

(26) Swank, *Ibid.*, p. 189-190.

かかる上からの特権的企業者層の動きに對應して、之と様々な仕方で絡みあい關係している小生産者又はこの種マニファクチュア内部の勞働者の中から、漸次上昇する者が現われ、やがてその上層は特権的企業者層に成上つて行く。

例えば、一七五〇年にニュー・ヨークのオレンヂ郡ワヤング(「ハドソン河から二六哩」に反<sup>(37)</sup> 鋤をもつ製 飯 場があつたが、之は鍛冶屋ローレンス・スクロウリーの所有にかかるともあつた。又一七二二年ロード・アイランドのニュー・ポートの鍛冶屋サムエル・ビゼルは植民地から釘製造の爲に二〇〇ポンドの貸付金を受けている。<sup>(38)</sup> ウィリアム・リチャーズは若い頃ペンシルヴェニアのコヴェント鍛冶工場及ウォリック熔鑪に雇われ、一七六八年頃ニュー・ジャージーのベスト鉄工場に鑄造工として雇われていた。独立戦争に際しては兵士として従軍し、一七八一年に同工場の経営者となり、一七八四年之を所有するに至つた。<sup>(39)</sup> 更にフィラデルフィアの鍛冶工トマス・ラターはマナトニー地方に一つの bloomery forge を設け、一七二〇年にはコールブルックデイル熔鑪を設立したカムパニーの主なメンバーとなつていた。彼の子孫の多くは優れたペンシルヴェニアの製鐵業者であり、独立宣言署名者ベンジャミン・ラッシーは彼の曾孫に當る。<sup>(40)</sup> 之等は小生産者又は労働者から漸次上昇し企業家になつて行く例であるが、かかる上昇して行く小生産者・労働者の中から種々の關係を通じて特權企業者層に接近し、之と結付いて行く者も現れて来る。例えばジェイムズ・オールドは鍛冶工としてウィンザー鍛冶工場に雇われていたが、一七六五年ブル銀工場を設立、更にレバノン附近と、チェスター、ランカシャー及びバーク各郡の鍛冶工場の所有權をもち、一七七三年にはレディング熔鑪の賃借人となつて居る。彼の妻はブル銀工場の敷地所有者の娘であつたらしい。かくて彼はペンシルヴェニアの初期製鐵業者の最も成功した者の一人で、一七九一、一七九二及び一七九三年度のペンシルヴェニア議 會の議員であつた。<sup>(41)</sup> 彼の兄弟ウィリアム・オールドもウィンザー鍛冶工場の鍛冶工から出發し、棒鐵生産者となり、後ステイゲル男爵の娘と結婚して居る。<sup>(42)</sup> 又ジェイムズ・オールドの娘はロバート・コールマンと結婚して居る。コールマンはアイルランドに生れ、一六歳で渡來、ジェイムズ・オールドの下で働き、一七七三年オールドの娘と結婚、

獨立戦争中はペンシルヴェニア民兵の將校を務め、一方結婚直後ザルフオード鍛冶工場を賃借し、ここでイギリス艦隊に對しデラウェア河を封鎖する爲の鎖を製造した。後エリザベス熔鑪の賃借人を経て、その所有者となつた。ここで大砲及び砲彈を製造したが、一七九二年に政府から二度に亙りドイツ人捕虜を合計七〇名(一名當り三〇ポンド、合計二、一〇〇ポンド)を受取つて居る。更に憲法會議の一員であり議 會議員でもあり、ウィスキー叛亂に際しては騎兵隊の指揮をとつて居る。<sup>(43)</sup> 斯の如く直接生産者から上昇した彼らの一部は地主・商人・貴族から轉化した特權的企業者層と結合しつつ、獨立戦争を遂行し、やがて支配階級に轉化して小生産者を壓迫する者として立ち現れるに至る。

(37) Swank, Ibid., p. 137.

(38) Swank, Ibid., p. 127.

(39) Swank, Ibid., p. 159.

(40) Swank, Ibid., p. 165-6; Binns, Ibid., p. 18.

(41) Swank, Ibid., p. 130-1.

(42) Swank, Ibid., p. 131.

(43) Swank, Ibid., p. 130-131.

#### 四

植民地のブルジョワ的進化の芽を上から摘みとりとするイギリス重商主義の植民地工業規制<sup>(1)</sup>及び植民地の諸獎勵政策<sup>(2)</sup>が總して植民地工業に重大な影響を與え得なかつた事はここに詳述する事をしない。又植民地に於ける中世的手

工業ギルドとてもボストンの桶工及び製靴工に限られ、しかも彼等の特權は農村の競争者により強く反對された。之に似た手工業者の團體も見られたが、早く消滅して問題とするに足りない。<sup>(3)</sup> 徒弟制度はかなり嚴格であつたが、徒弟は不足し逃亡する者も多かつた。この爲七ヶ年の年期規定を維持出來ず、四ヶ年或は三ヶ年にさえ短縮しようとする傾向が現れて來た。一方職人が西部の土地を求め、假令貧しくても獨立の農民になろうとし、黒奴の競争的進出も共働して略、一七四〇年迄には諸規制は概ね消滅してしまふ。<sup>(4)</sup> かくて内外の規制から解放されつつ、自由な生産力は都市に農村に展開し始める、そして人口の増加と交通の發達に伴い、豊かな農村のさ中に有利な立地點を選んで工業村落・市場町が出現し、やがて工業町へと上昇して行く。<sup>(5)</sup>

以上に於て私は植民地工業の基軸たる織物業及び鐵工業の内部に於ける二つの相對立する體系を述べた。獨立戰爭に際して植民地支配階級は二分した。——即ちロイヤリスト及びパトリアット。ロイヤリストは財産を沒收され亡命するが、必ずしも總てのロイヤリストがかかる運命に遭つたのではない。その原因は明かではないが、恐らくパトリアット側の支配階級と親戚・友人關係を結んでいた事によつて保護されたものと考へられる。そしてロイヤリストの財産も出來る限り温存されていた。かくて植民地支配階級は打撃を受けつつも、新な一群を加えて依然その地位を確保していたのである。<sup>(6)</sup> 一方小生産者はイギリスからの獨立という點でパトリアットの支配階級と同盟した。ロイヤリストの財産は沒收され、南・中部の免役地代、<sup>(7)</sup> 限嗣相續、長子相續制等の封建的諸制度は廢止された。併し彼等は獨立後、漸く展開し始めたマニユファクチュア主及び其と判別し難い小生産者の擡頭を恐れた支配階級の反革命に遭つて強權により壓服されて了う。之は結局そのブルジョワ的發展の未成熟の故と云わざるを得ないのである。植民地を飽く迄重商主義的再生産機構に緊縛しておこうとするイギリス及び之とつらなる植民地ロイヤリスト、之

に對して上からブルジョワ化しつつこの支配網から離脱せんとするプランター・大地主・前期的商人等の植民地支配階級、及び自らの未成熟の故に之と同盟しつつ利用されて行くマニユファクチュア主・小生産者。そして夫々の對立の間を動搖する中間的存在。之が獨立戰爭期の階級構成である。其故に植民地内部に關する限り、寧ろ上からのブルジョワ化と下からのブルジョワ化の對立なのであり、本來の資本—労働關係に見られる對立ではないのである。この對立が正面から行われるには、南北戰爭を経て前期的資本及びプランターが打倒されねばならなかつた。

(1) Clark, Op. cit., pp. 9—30. 毛織物業については Cole, Op. cit., pp. 38—47, 鐵工業については Bining, Op. cit., *passim*.

(2) Clark, *Ibid.*, pp. 31—72, Cole, *Ibid.*, pp. 34—37; Bining, *Ibid.*, *passim*.

(3) Clark, *Ibid.*, p. 66, 102, Bridenbaugh, Op. cit., p. 144.

(4) Bridenbaugh, Chapter V. (pp. 125—154).

(5) この點については第二節に既述した。尚 Bridenbaugh, *Ibid.*, p. 53—4 と Clark, *Ibid.*, p. 136—7 を見解参照。

(6) East, Op. cit., Chapter X, (pp. 213—238).

「附記」本稿は慶應義塾學事振興資金による研究の一部である。